遅れてきた変則投法

中沢匠磨（白鷗大）

今大会は20回記念大会のため5連盟15チームが参加し、11月7日の準々決勝は1日4試合のタイトなスケジュールになった。第4試合の白鷗大対杏林大の試合開始時間は19時近くに。秋の寒風が吹きすさぶなか、大会初日から取材を続けてきた筆者は「先発の中沢匠磨をチェックしたら、早めに退散しよう」と考えていた。

ところが、いざ白鷗大の先発右腕・中沢の投球を見てみると、帰るに帰れなくなった。想像以上に面白みを感じて、気づけば試合終了まで横浜スタジアムに留まっていた。試合後は中沢本人をつかまえて、話を聞くことにした。

白鷗大足利高時代から評判のドラフト候補だったが、投球フォームが様変わりしていて驚いた。肩幅よりはるかに大股に開いたセットポジション。左足を上げつつスピーディーに体重移動すると、右腕をコンパクトに上げてトップを作り、鋭くタテに振り下ろす。少しぎくしゃくとした印象の変則フォームだった。

ただし、放たれたストレートの球威は抜群だった。ボールにタテの角度がつき、捕手のミットにめり込むような圧力がある。さらにタテに大きく変化するカーブ、空振りを奪えるフォークも目を引いた。白鷗大といえば完成度の高い左腕の松永ばかりが取り沙汰されるが、中沢も立派な2025年のドラフト候補だ。

その変則投法に行き着いた流れを中沢に説明してもらった。

「高校時代に肩をケガしてから、負担がかからないフォームを模索してきました。もともとトップを作るのが遅くて肩に負担がかかっていたので、腕の振りをショートアームにして早めにトップを作る今の形になったんです」

高校2年春に右肩を痛め、丸1年も投げられない時期があった。中沢は「ケガで投げられないのが一番悔しいです」と噛みしめるように語る。3年時にはプロ志望届を提出したが、プロ球団から調査書すら届かず指名漏れ。中沢は白鷗大に進学する。

「同期の高校生が指名されていて、悔しかったです。その悔しさを大学で晴らそうと決めました」

変則投法の陰には涙ぐましい努力があった。ただし、プラスの副産物もあったと中沢は前向きにとらえている。

「普通のフォームのピッチャーはいっぱいいますけど、自分みたいなフォームは逆に貴重だと思います。なので個性を出していこうと。ずっと悪かったコントロールもまとまってきました」

今秋の関甲新学生リーグでは4登板で3勝0敗、23イニングを投げて防御率1・96を記録した。中沢は来季への強い決意を口にする。

「今7は最速148キロなので、来年は出力を上げて150キロ以上を投げたいです。点を取られない勝てるピッチャーになって、できればプロに行きたいですね」

横浜市長杯は準決勝で日本体育大に3対4で敗れ、明治神宮大会の出場はかなわなかった。それでも、絶対的なエースの松永に加えて中沢が本格化したとなれば、白鷗大は来年の全国制覇を本気で狙える陣容のはずだ。

◇　◇　◇

今回紹介した4選手は、いずれも来年のアピール次第でドラフト戦線に浮上してくるだろう。大学ラストイヤーにどんな進化を見せてくれるのか、今から楽しみだ。



中沢 匠磨（なかざわ・たくま）

183センチ79キロ・右投左打。栃木県出身。白鷗大足利高では2年時に右肩痛を発症するも、ドラフト候補に。白鷗大では変則投法を会得し、3年秋に3勝を挙げた。最速148キロの速球とタテ変化が光る。

野球太郎的ドラフト候補ランキング 2025始動編

★アンケート方法★
『野球太郎』ライター、関係者30人に、来年のドラフト候補・総合ランキングTOP50を答えてもらった。
1位に50ポイント、2位に49ポイント、3位に48ポイント……49位に2ポイント、50位に1ポイントと割り振り、獲得ポイントに応じて、ランキングを作成した。

『野球太郎的ドラフト候補ランキング』を1回だけ一度リニューアル！　総合ランキング一本勝負でお送りします。ポイント付与の形式上、これまでと獲得ポイントがモリモリに増えていますが、そこは気にせず、順位間、選手同士の差にご注目し、いままで以上にたくさんの選手が登場する『野球太郎的ドラフト候補ランキング』をお楽しみください！

ドラフト候補ランキング／1〜10位

No.1	石垣元気	健大高崎高 投手／右投両打	1120pt
No.2	堀越啓太	東北福祉大 投手／右投右打	1099pt
No.3	髙木快大	中京大 投手／右投右打	1016pt
No.4	森陽樹	大阪桐蔭高 投手／右投左打	968pt
No.5	立石正広	創価大 三塁手／右投右打	935pt
No.6	髙須大雅	明治大 投手／右投右打	908pt
No.7	渡邉一生	仙台大 投手／左投左打	814pt
No.8	芹澤大地	高蔵寺高 投手／左投左打	780pt
No.9	中西聖輝	青山学院大 投手／右投右打	778pt
No.10	島田舜也	東洋大 投手／右投右打	714pt

No.1 石垣元気 1120pt
健大高崎高　投手／右投両打

2年生の段階から常時150キロをキープするような剛腕が総合1位に輝く！

No.2 堀越啓太 1099pt
東北福祉大　投手／右投右打

続くのは大学野球界の剛腕。計測機材の違いながら160キロ超は半端ない

No.3 髙木快大 1016pt
中京大　投手／右投右打

今春リーグ戦で完全試合を達成し、大学選手権、大学代表でも大活躍！

No.4 森陽樹 968pt
大阪桐蔭高　投手／右投左打

中学時代は軟式野球界の超有望選手。最後の1年でさらなる飛躍に期待

No.5 立石正広 935pt
創価大　三塁手／右投右打

野手でトップになったのは立石。すでに強烈な打球は今年のドラ1と双璧

No.8 芹澤大地 780pt
高蔵寺高　投手／左投左打

夏から評価急騰中！　“意外”な経歴から頭角を現した高校生左腕

野球太郎的ドラフト候補ランキング 2025始動編

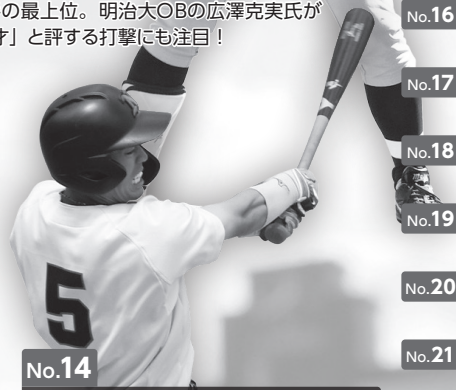
ドラフト候補ランキング／11〜30位

No.11	福田拓翔	東海大相模高	投手／右投右打	705pt
No.12	小島大河	明治大	捕手／右投左打	698pt
No.13	松下歩叶	法政大	三塁手／右投右打	664pt
No.14	谷端将伍	日本大	三塁手／右投右打	655pt
No.15	繁永晟	中央大	二塁手／右投右打	588pt
No.16	久野悠斗	明治大	投手／左投左打	587pt
No.17	伊藤樹	早稲田大	投手／右投右打	555pt
No.18	藤川敦也	延岡学園高	投手／右投右打	537pt
No.19	村上裕一郎	ENEOS	外野手／右投右打	504pt
No.20	佐藤龍月	健大高崎高	投手／左投左打	473pt
No.21	西村一毅	京都国際高	投手／左投左打	472pt
No.22	松川玲央	城西大	遊撃手／右投左打	430pt
No.23	藤原聡大	花園大	投手／右投右打	418pt
No.24	宮内渉吾	中京大中京高	投手／右投右打	389pt
No.25	小田康一郎	青山学院大	一塁手／右投左打	384pt
No.26	後藤凌寿	トヨタ自動車	投手／右投右打	377pt
No.27	市川祐	日本大	投手／右投右打	376pt
No.28	池村健太郎	トヨタ自動車	投手／左投左打	367pt
No.29	大塚瑠晏	東海大	遊撃手／右投左打	347pt
No.30	齊藤汰直	亜細亜大	投手／右投右打	343pt



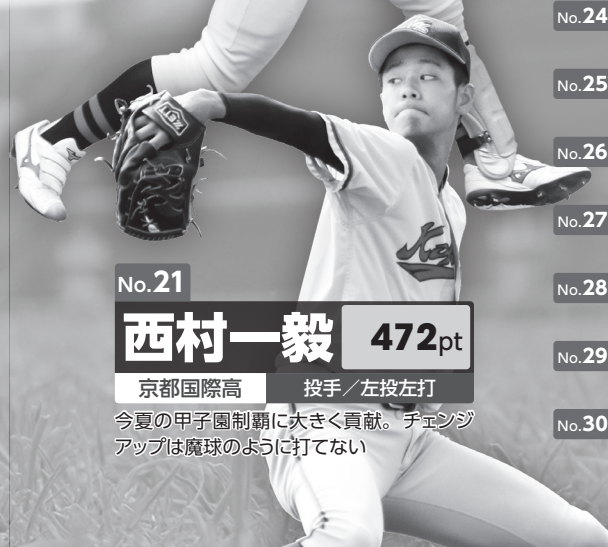
No.12 小島大河 698pt
明治大 ／ 捕手／右投左打

捕手の最上位。明治大OBの広澤克実氏が「天才」と評する打撃にも注目！



No.14 谷端将伍 655pt
日本大 ／ 三塁手／右投右打

前後の順位である松下、繁永ら、右打ち内野手が来年の候補に多い



No.21 西村一毅 472pt
京都国際高 ／ 投手／左投左打

今夏の甲子園制覇に大きく貢献。チェンジアップは魔球のように打てない

ドラフト候補ランキング／31〜60位

No.31	田和廉	早稲田大	投手／右投右打	339pt
No.32	阿部葉太	横浜高	外野手／右投左打	333pt
No.33	新井瑛太	滝川高	投手・外野手／右投左打	331pt
No.34	国本航河	筑波大	投手／右投右打	320pt
No.35	赤埴幸輝	天理高	遊撃手／右投右打	303pt
No.36	阪下漣	東洋大姫路高	投手／右投右打	294pt
No.37	秋山俊	中京大	外野手／右投右打	284pt
No.38	石井巧	NTT東日本	遊撃手／右投右打	270pt
No.39	中村龍之介	東海大相模高	外野手／左投左打	267pt
No.40	山城京平	亜細亜大	投手／左投左打	265pt
No.41	松浦佑星	ENEOS	二塁手／右投左打	248pt
No.42	陣内優翔	海星高	投手／右投右打	244pt
No.43	能美誠也	星稜高	捕手／右投左打	228pt
No.44	川原嗣貴	Honda鈴鹿	投手／右投右打	219pt
No.45	勝田成	近畿大	二塁手／右投右打	214pt
No.46	赤木晴哉	佛教大	投手／右投右打	190pt
No.47	増居翔太	トヨタ自動車	投手／左投左打	187pt
No.48	金本貫汰	東海大相模高	一塁手／右投左打	183pt
No.49	工藤泰己	北海学園大	投手／右投右打	179pt
No.50	稲川竜汰	九州共立大	投手／右投右打	177pt
No.51	中野大虎	大阪桐蔭高	投手／右投右打	173pt
No.52	竹丸和幸	鷺宮製作所	投手／左投左打	168pt
No.53	毛利海大	明治大	投手／左投左打	163pt
No.54	奥村頼人	横浜高	投手／左投左打	151pt
No.55	小畠一心	立教大	投手／右投右打	148pt
No.56	横田蒼和	山村学園高	遊撃手／右投左打	143pt
No.57	冨士隼斗	日本通運	投手／右投右打	142pt
No.58	野間翔一郎	近畿大	外野手／左投左打	136pt
No.59	鈴木豪太	大阪商業大	投手／右投右打	135pt
No.60	蝦名翔人	青森山田高	二塁手／右投右打	129pt



No.33 新井瑛太 331pt
滝川高 ／ 投手・外野手／右投左打

快速球が投げられれば、打撃も勝負強い。来年より輝く才能はどっち!?

No.48 金本貫汰 183pt
東海大相模高 ／ 一塁手／右投左打

夏に横浜スタジアムで放った、ライトウイング席への一撃は誰もが驚いた



No.67 宮下朝陽 110pt
東洋大 ／ 遊撃手／右投右打

ケガで秋は全休。焦りそうな現状も乗り越え、復帰に向けて頑張ってください！

ドラフト候補ランキング／61〜70位

No.61	山下来球	国士舘大	外野手／左投左打	128pt
No.62	下重賢慎	健大高崎高	投手／左投左打	125pt
No.63	田村剛平	京都産業大	投手／右投右打	124pt
No.64	田中多聞	JFE西日本	外野手／左投左打	123pt
No.65	外丸東眞	慶應義塾大	投手／右投右打	120pt
No.66	大川慈英	明治大	投手／右投右打	111pt
No.67	宮口龍斗	智辯和歌山高	投手／右投右打	110pt
No.67	小林純大	花園大	投手／左投左打	110pt
No.67	エドポロケイン	大阪学院大	外野手／右投右打	110pt
No.67	宮下朝陽	東洋大	遊撃手／右投右打	110pt

伝説のプロ野球選手に会いに行く～

【奇跡の首位打者」は今も打撃を探求していた

谷沢健一（元中日ドラゴンズ）

～ピッチャーに比べてね、バッターは進歩してないですよ

取材・文＝高橋安幸

２０２４年７月25日、バンテリンドームで開催された中日ＯＢ戦。ハイライトは権藤博さんと谷沢健一さんの対決で、85歳の権藤さんはしなやかに腕を振り、山なりでも見事な投球を見せた。その一球をとらえた76歳・谷沢さんのスイングは鋭く、往年の打撃が頭に浮かんだ。17年間の現役生活では、「不治の病」といわれた両足アキレス腱痛から復活を遂げた巧打者。どんな選手だったのか、あらためて知りたくなった。

３月の西武に始まって、７月は巨人−阪神、そして中日――。２０２４年は３つのＯＢ戦が相次いで開催され、僕自身、なかでも印象に残ったのは、バンテリンドームで行われた初めての中日ＯＢ戦だった。

総勢59選手が昇竜チームと強竜チームに分かれて対戦。一番のハイライトは、両チームの監督を務める権藤博さんと谷沢健一さんの対決となった。

御年85歳の権藤さんは１９６１年に入団し、１年目にいきなり35勝を挙げ、最多勝に新人王を獲得。翌62年も30勝で最多勝に輝く大エースだった。が、登板過多で右肩を痛めた後は成績が急下降して野手に転向。68年限りで引退と短命に終わったが、球団史を語るうえでは絶対に欠かせない右腕である。

対する76歳の谷沢さんは早稲田大から69年のドラフト１位で入団。巧打の中距離打者として打線の中軸を担い、76年、80年と首位打者に輝き、74年、82年の優勝に貢献してベストナイン５回（外野手部門１回、一塁手部門４回）。プロ17年間で通算２０６２安打、２７３本塁打、９６９打点と、球史に残る成績を挙げている。

６回表、権藤さんがゆっくりと歩を進めてマウンドに上がり、ウオーミングアップを始めた。高齢でも腕の振りはしなやかで、投球は山なりでもストライクゾーン近辺に決まる。10球を投げた頃、ウエイティングサークルで素振りをしていた谷沢さんが左打席に向かい、右手で脱帽して挨拶。権藤さんは右手で帽子のつばを触わって敬礼で応えた。

初球、２球目と外角に外れてボール。すると谷沢さんは体の前で線を描くように左手を動かしてマウンドに顔を向け、内角への投球を要求。３球目は真ん中へのストライクとなり、次の４球目だった。内角球をとらえたスイングは鋭く、打球は一塁ゴロになったが速く、往年の勇姿が僕の頭に浮上した。

その打棒が光った現役時代、谷沢さんは「不治の病」といわれた両足アキレス腱痛を〝日本酒療法〟で完治させ、復活を遂げたことでも知られる。以前の僕は、谷沢さんといえばアキレス腱と日本酒、というイメージが強かった。それが今、一振りを見て、どんな選手だったのか、あらためて知りたくなった。



【写真】産経新聞社

谷沢健一（やざわ・けんいち）

1947(昭和22)年生まれ。千葉県出身。習志野高～早稲田大～中日。69年のドラフト1位で中日に入団すると、1年目から打線の中軸を担い新人王を獲得。巧打の中距離打者として活躍し、76年に首位打者。その後、78年から両足アキレス腱痛に苦しみ引退を覚悟するも、酒マッサージによる治療を経て80年に復活。2度目の首位打者に輝き、カムバック賞を受賞した。85年には通算2000安打を達成し、86年限りで引退後は解説者、評論家。94年～95年に西武で打撃コーチを務め、アマチュアでも指導している。

僕らのときは暗黒の時代でした

ＯＢ戦から2カ月半が過ぎ、プロ野球公式戦の全日程が終了した翌日。神奈川・横浜市青葉区の喫茶店で谷沢さんと待ち合わせた。店は市営地下鉄ブルーラインの駅構内にあり、約束の午後2時の20分前、改札前を歩く谷沢さんに気づいて声をかけた。想像以上に大柄で、橙色が鮮やかな薄手のセーターに細身の黒いパンツを合わせたスタイルは、ユニフォーム姿よりも若々しい。

「何から行きましょうか」

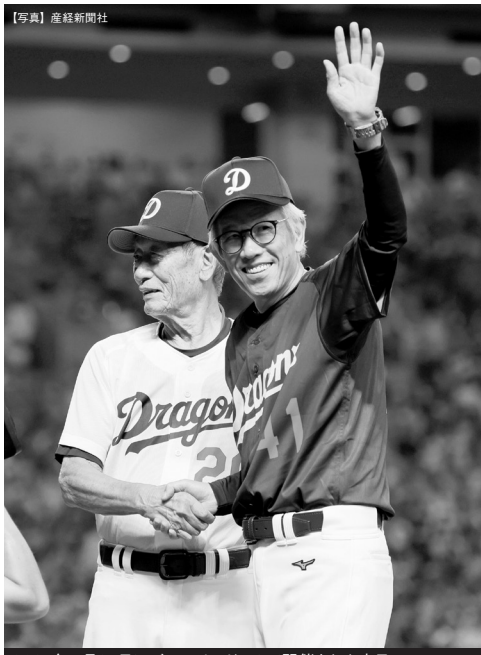
一番奥の席で面と向かうと、谷沢さんはにこやかな表情で言った。とっさに、アキレス腱痛のことが口を衝いて出た。

「僕が一番最初にアキレス腱を痛めたのはね、大学4年のときなんですよ。アキレス腱と踵の付け根の部分に米粒大の軟骨みたいなものができたの、両足に。今なら内視鏡手術で取れるんでしょうけど、当時はなかなかね」

プロ入り前からの故障とは意外だが、原因として「めちゃくちゃ走らされたり、先輩からの説教で正座させられたり」したことが挙げられた。3年時まで、両足首に過度なストレスが繰り返しかかり続けていたようだ。

「まあ、それは言い訳だけどね。ふふっ。でも、あまり目標のない六大学野球でしたよ。だって最高の大会がアジア大会だもの。韓国、台湾、フィリピン。当時は楽に勝てる相手だったし、日米大学野球はまだなかった」

リーグ戦では2年春に打率・３９６で首位打者を獲得し、６季連続で打率３割を超えてベストナイン６回。通算82試合で１１１安打、18本塁打、63打点、打率・３６０という成績


【写真】産経新聞社
2024年7月25日にバンテリンドームで開催された中日OB戦。対決直後の権藤博さん（左）と谷沢さん（右）

を残し、六大学を代表する左の強打者だった谷沢さん。3年秋には優勝も経験し、4年時は主将を務めているのだが、「目標」はもっと高いところにあり、それはプロ入りとはまた違うものだったのか。

「プロを意識したのは4年のときかな。当時の六大学ですから、新聞の扱いも大きかったり、週末にはNHKのニュースで試合結果がテロップで出たり、注目されていたんですね。だけど、それだけですよ。早稲田で僕らよりずっと先輩の広岡（達朗）さん（元・巨人）とか徳武（定之）さん（元・国鉄ほか）は、アメリカ遠征に行ってるんです。でも、僕らのときはなかった。暗黒の時代でした」

これまで早大出身の野球人10名以上に取材してきたが、そのように表現する方はいなかった。谷沢さんと同期の荒川堯さん（元・ヤクルト）にしても同様だ。技術的な向上もあまりなかったのだろうか。

「技術的なことはね、高校時代にずいぶん教わってるんですよ。習志野に進んだのも、いい指導者がいるからということでね」

新しいチーム、習志野に行きたい

「いい指導者」とは、元朝日新聞運動部記者の久保田高行。母校・早稲田実業の野球部監督を長年務め、総監督だった57年には監督の宮井勝成（早実―中央大）率いるチームで選抜高校野球大会に出場。2年生エースながら3試合連続完封を果たした王貞治（元・巨人）の活躍が大きく、初優勝を成し遂げた。習志野高ではコーチとして指導に当たっていた久保田は、62年、学校創立6年目で夏の甲子園大会に初出場させている。

「初めての甲子園で中京商とぶつかって2対0で負けた。健闘ですよ。僕はそれを中学3年のときにテレビで見ててね、習志野に行きたいな、新しいチームでやりたいなと」

中学時代、谷沢さんは左投手として千葉県下で注目されていた。ある強豪校から誘われると野球部OBから監督、教諭、家族までが進学させようとしたが「嫌って逆らった」。

「久保田さんは作戦が非常にアメリカナイズされていて、早実では宮井監督の知恵袋でね。『アメリカの野球』なんて聞くと、当時は僕ら、ウキウキしちゃうんだけど、例えば、攻撃で一、三塁になるとね、下位打線だったらほとんどディレードスチールやるんですよ。ただしベンチからサイン出さない。自分たちでやれと。それでよく得点してね」

久保田に打力を見込まれ、外野手に転向した谷沢さんにとって、もう一人「いい指導者」がいた。やはり早実の出身で早大でも活躍した石井順一。80年までプロ野球で使用された圧縮バットの考案者だが、谷沢さんが入学した63年、習志野の監督に就任したという。これは全くの初耳だった。

「それこそ、石井さんは早稲田でアメリカ遠征に戦前に行ってる方でね。ジョー・ディマジオ（元・ヤンキース）を育てたフランク・オドール（元ヤンキースほか）に打撃指導を受けたこともあるし、3Aのサンフランシスコ・シールズの練習生でもあった。それでオドールの理論を学んできているわけ」

石井は早大卒業後、家業の運動具店を継ぐに当たり、バット製造修業のために渡米。修業の傍ら現地のクラブチームと交流するなど本場の野球に触れる機会が多い人だった。

「雨で練習が休みのとき、教室に集合すると、石井さんがアメリカで学んだ打法を黒板に書きながら教えてくれる。バットの軌道だとか図を描きながら。それはもう目から鱗ですよ。ずっと自己流でやってましたからね」

当時はバット製作会社の社長でもあった石井監督の下、甲子園出場は果たせなかった。それでも、〝石井打法〟が行き届いたチームの打撃は飛距離が違った。どの相手校も、外野手がフェンス沿いに守ったという。

「レギュラー全員が同じ形でね。ダウンスイングなんて全く違うし、レベルスイングでもない。お尻を少し投手のほうに出して、投手のほうの腰骨を下げる。スーッと振るとアッパースイングになりがちだから、バットを耳の辺りに上げるんですよ」

本当はプロに行きたくなかった

監督に打撃の形を学び、コーチに作戦面、インサイドベースボールを学んだ谷沢さんにはもともと飛ばす力があり、プロに注目されていた。65年の第1回ドラフトで阪急（現・オリックス）から4位で指名されている。

「担任の先生から『おまえ、阪急に指名されたよ』と。すぐに『そんなとこ行かないですよ』って答えた。はっはっは。『じゃあ、おまえ、どこ行くんだ?』『早稲田行きます。受験します』って。『早稲田なんて無理だよ。勉強なんかしてねえのに』って言われたんだけど、9月から1日10時間ぐらい勉強してね。当時は推薦入学なんてなかったから」

受験の結果、第二文学部に合格。入学後、春のリーグ戦が終わると、谷沢さんは30人しか入れない寮に1年生にして入った。

「寮に入ったとき、倉庫があって、そこに早稲田に資料がいっぱいあるんです。初代監督の飛田穂洲先生だとか、初代部長の安部磯雄先生だとか、アメリカに遠征したときの資料が。こっちは向こうの野球に関して、習志野で石井さんから薫陶を受けているから、見たいと思って入ろうとした。そしたらマネージャーに止められた。『ここは選手は入れない』と。がっかりしたのを憶えてます」

打撃も作戦面も、習志野でアメリカ仕込みの指導を受けていた谷沢さんにすれば、その点で先進の早大に入り、さらに深く本場の野球を学べる――との思いがあったのだろう。ところがアメリカ遠征もなく、日米大学野球もまだなく、資料さえ閲覧できない。ゆえに猛練習と説教の先に好成績を残しても、「暗黒の時代」という表現になったに違いない。

とはいえ、谷沢さんにとって2度目となる69年のドラフト。中日に1位で指名されてプロ入りの道が開かれたのだ。「暗黒」から離れ、前途洋々だったのではないか。

「中日のスカウトの方は、僕の足の踵に軟骨ができているのを知っていたんです。知っているのも、いい指導者がいるからということでね」



いながら指名した。それはすごいですよ」

3年生までは速かった足が遅くなったことから、そのスカウトはケガについて調査していた。選手とスカウトが会うことができた当時、谷沢さんは直に知らされていた。

「だから、僕、本当はね、プロに行きたくなかったんです。社会人に行こうと思ってた。足のことが不安だったからね」

どの文献資料にもなかった言葉に衝撃を受けるが、大学時代から痛み止めの注射が欠かせなかったとのことで、希望に満ちあふれて新たな世界に挑めなかったのは確か。逆に言えば、谷沢さんの不安を知っていながら指名した球団に入ることは、必然だったのか。早大で3年生まで付けていた背番号14をつけ、中日に入団する。

「行くなら東京のチームに行きたかったんですが、スカウトの方が本当に一生懸命でね」

変わるきっかけは王さんからの助言

入団時、中日の監督は水原茂（元・巨人）だった。この水原と確執があった4番打者の江藤慎一が、谷沢さんと入れ替わる形で退団。江藤は首位打者を2回獲得した（当時）右の強打者で、その穴を埋める選手の一人として、谷沢さんは即戦力を期待された。

実際、1年目の70年は7番・レフトで巨人との開幕戦に出場すると、プロ初打席で初安打を放って上々のデビューを果たす。5月下旬、新人ながら打率がリーグトップになった頃には周りの評価も人気も急上昇。常に絶えない笑顔で〝谷沢スマイル〟といわれ、巧打が光る打撃は名人肌と称され、「闘将」と呼ばれた豪傑タイプの江藤とは正反対だった。

「でも、5月末からドーンと落ちて、梅雨時期から夏場にかけて率が下がって…。ピッチャーもよかったけど130試合なんて経験ないから、どんどん、疲れとともに落ちていくんです。足は何とか持ってたけどね」

不振でも二軍降格はなく、最終的には126試合に出て規定打席に到達し、打率・251、11本塁打、45打点。新人王に選出された。当時コーチのウォーリー与那嶺はハワイ出身で米マイナーでもプレーしている。アメリカ仕込みの打撃を体得した谷沢さんへの助言が、生きる部分もあったのではないか。

「それが全然、打撃理論が合わなくて。だからウォーリーが『こうやれ』って言っても、僕ね、上の空で聞いてたの。そしたらウォーリーが『おまえどこ見てんだ！』って怒ってね。それでも一切、言うこと聞かない。シーズン終わるまで。あっはっは」

挨拶を交わしたときから続いていた〝谷沢スマイル〟が、一段とはじけた。

「習志野で石井さんに教わったタイミングの取り方が神経の中まで身についちゃってるから、ウォーリーが何を言ったって。はっはっは。打てばいいと思ってたから」

確かに2年目こそ打率・260だが、3年目から2割9分台が続いていく。数字だけを見れば、安定そのものという成績だ。

「いやあ、それもね、8月いっぱいぐらいまでは3割をキープしてるんです。で、夏の疲れから食べられなくなって落ちてきちゃう。変わるきっかけは王さんの助言でした」

2割9分台が4年続いた75年のオフ。当時の打撃コーチ、早実出身の徳武が後輩の王と食事する際、早大の後輩に当たる谷沢さんを呼んでくれたことがあった。

「王さんから『3割打たければ3割5分ぐらい目指さないと』って言われたんです。そしたら王さん自身は『ホームラン、1000本目標にしてる』って言う。当時、700本ぐらい打ってるときですよ。それだけ目標数ね、上げないとダメだと」

野球を続けるのはほとんど無理

翌76年の開幕前、心機一転で背番号を41に変えた谷沢さんが3割5分を目標に掲げると、周りからバカにされるばかりだった。

「そういう人たちは一切、無視して、率を目指すんだったら反対方向にヒットを打つ。センターからレフトの方向にヒットを固める。この年、ホームラン11本なんですよ。打点が52ですよ。目標をヒットにしたんです」

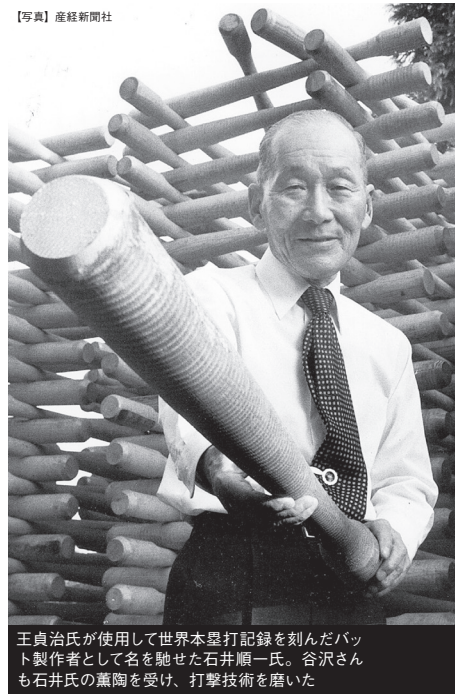
結果、シーズン終盤、谷沢さんは巨人の張本勲と首位打者を争った。と言っても、中日が10試合を残した時点で谷沢さんは打率・339でリーグ3位。首位の張本の・358とは1分9厘もの大差をつけられ、残り試合に5割を打っても打率を3割5分に乗せるのが精一杯だった。が、そこから奇跡的な追い込みを見せ、36打数20安打の・556をマークするのだが、最後の広島とのダブルヘッダー第1試合、4打席でヒット3本が首位打者の条件となった。すると1、2打席目で2安打した谷沢さんは第3打席、二番手の高橋里志に対し13球粘った末に三振してしまう。

「4打席目、バットを振るのが怖くなるんですよ。だから打席外して、気持ちを整理して、自分は今年、こういうバッティングをずっと続けてきた、これでいこうと気持ちを奮い立たせて。初球、足元へファウルを打ったんです。それでスッとして、2球目、高橋さんがちょっと沈むようなフォークを投げてきて、打ったらセンター前に抜けた」

打率・3548で、張本の・3547を1毛抜く大逆転。「奇跡の首位打者」となった。

「ただ、満足感はなかったですよ。だってホームランは少ない、打点は少ない。3番バッターとして貢献度はそんなに高くないんだもの。しかも契約更改に行ったって、タイトル料はあったけど、年俸は上がらない。そこから落ちたの、足を痛めて」

翌77年も打率3割を超えた谷沢さんだったが、78年6月、アキレス腱の痛みで歩くこと



【写真】産経新聞社

王貞治氏が使用して世界本塁打記録を刻んだバット製作者として名を馳せた石井順一氏。谷沢さんも石井氏の薫陶を受け、打撃技術を磨いた

谷沢健一　プロ全成績

年度	チーム	試合	打席	打数	得点	安打	二塁打	三塁打	本塁打	打点	盗塁	犠打	四球	死球	三振	打率
1970（昭和45）年	中日	126	479	427	39	107	17	**6**	11	45	6	6	34	6	66	.251
1971（昭和46）年	中日	123	463	423	47	110	12	3	16	41	7	6	30	3	61	.260
1972（昭和47）年	中日	**130**	537	465	58	135	21	4	15	53	2	1	63	7	42	.290
1973（昭和48）年	中日	126	518	454	47	134	26	0	10	45	0	2	53	7	35	.295
1974（昭和49）年	中日	125	516	466	73	135	**31**	0	22	77	2	4	39	3	51	.290
1975（昭和50）年	中日	129	527	470	57	138	20	0	17	71	2	3	46	4	46	.294
1976（昭和51）年	中日	127	547	496	66	176	**36**	1	11	52	4	4	37	4	51	**.355**
1977（昭和52）年	中日	**130**	554	493	65	154	29	4	14	55	5	5	53	2	51	.312
1978（昭和53）年	中日	70	199	184	17	52	14	0	2	18	1	1	11	1	27	.283
1979（昭和54）年	中日	11	13	12	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	1	.167
1980（昭和55）年	中日	120	481	425	61	157	27	1	27	80	2	0	50	2	59	**.369**
1981（昭和56）年	中日	127	506	462	57	147	22	3	28	79	4	0	39	0	63	.318
1982（昭和57）年	中日	129	526	471	57	132	20	1	21	85	2	2	47	2	59	.280
1983（昭和58）年	中日	**130**	548	485	60	153	**33**	0	21	87	1	1	57	2	56	.315
1984（昭和59）年	中日	**130**	572	505	84	**166**	20	1	34	99	3	1	63	2	67	.329
1985（昭和60）年	中日	104	405	360	37	104	9	0	11	47	1	0	42	1	44	.289
1986（昭和61）年	中日	94	241	220	22	60	11	1	13	35	0	2	17	1	28	.273
通算：17年		1931	7632	6818	847	2062	348	25	273	969	42	38	682	47	807	.302

※各年度の**太字**はリーグトップ（またはワースト）



さえできなくなって戦線離脱。年々、痛み止めの注射が効く期間が短くなっていた。日本全国20~30カ所の医院を訪ねたが全治の見込みは得られず、痛み止めを併用しつつ少しずつリハビリを続けて9月に一軍復帰を果たす。が、半ば無理をしたためか、翌年2月のキャンプで痛みが再発したという。

「途中で名古屋に帰ってきちゃった。痛くて練習する術がないから。で、家族を呼んで『これから野球を続けるのはほとんど無理だから』って話して。親父が千葉でやってた運動具店を手伝うつもりでいたんです」

プロ10年目の開幕前、30歳にして現役引退の可能性があったとは……。

「そのとき、1本の電話があってね。愛知の春日井に住む中日ファンから『うちのおふくろが3年間寝たきりだったが、ある治療によって自分の足で歩けるようになった。だから谷沢選手の足も絶対、治るはずだ』と。最初、断ったんだけども3回も4回もしつこくかけてくるから。『じゃあ、おまえさんの顔を立てるから』と、生意気な口きいてね。電話口の印象から、同じような年代だったんで」

痛くても全力でプレーできる痛み

ファンが選手宅に電話――。今ではあり得ない行動はともかく、谷沢さんは春日井の工場地帯にある日本家屋に案内された。中を覗くと十何畳の部屋の中央にせんべい布団が敷いてあり、布団にうつぶせになった人の全身を、75~76歳とおぼしき「おじいさん」がさすっていた。時折、体に振りかける水のようなものは日本酒だと、あとでわかった。

「こんなんで治るわけないと思って帰りかけたんです。そしたら『谷沢君、すぐ診てやるから』とおじいさんに呼び止められて。周りで待ってる皆さんにはすまなかったけど、布団にうつ伏せになると、足の長さ、尻の高さ、肩の高さが左右で違うと。それだけ体がゆがんでいるのを、足の爪先から緩めていくんです。それを全身。そのかわり、アキレス腱には一切触わらない。周りから緩めていく」

しばらくすると、夏でも靴下を履くほどに冷たかった足がポカポカ温まり、何か感触がいい。もしかしたら…と思った谷沢さんは、そのまま治療を続けることにした。

おじいさんの名は、小山田秀雄。戦前は陸軍中野学校の前身、特務機関の元諜報部員だった。戦時中、中国戦線で捕虜となったときのこと。拷問を受けて瀕死のなか、看守から「死ぬ前に何かほしいものはないか」と聞かれ、所望した日本酒を体に擦り込んで体調を回復させ、脱獄に成功する。この自身の体験をもとに、戦後、日本酒を体に擦り込む〝酒マッサージ〟を考案。当初、福岡で活動したことから、西鉄（現・西武）監督の三原脩の下でトレーナーを務めた経験もあった。

「先生の自宅まで追いかけて治療してもらったら、実際、痛みがなくなった。痛くて走れない痛みじゃなくて、痛くてもプレーできる、全力で走れる痛みに変わったんです」

完治ではなく、すぐに全力を出せたわけでもなく、79年は二軍でのリハビリが続いた。

それでも夏場には二軍戦に出て、9月には一軍に復帰すると同23日の大洋（現・DeNA）戦に代打で出場。翌80年のキャンプには小山田が同行して治療が続き、徐々に体力が回復してキャンプ終盤には全力を出せるところまできた。が、当時監督の中利夫は開幕時、「チームが軌道に乗るまでベンチにいてくれ」と谷沢さんに通告。ところが、直後に大島康徳が交通事故を起こし、代わりに一塁で出場することになり、打率・380、5本塁打で4月の月間MVPを受賞する。

「打法を変えてね。ステップが広かったのを、体の回転を上げるために狭くして。足を保護するためにスパイクもハイカットにして。ナゴヤ球場で試合が終われば、小山田先生が名古屋のホテルに泊まってたから、部屋で治療してもらって、疲れを取って家に帰ってた」

今で言うパーソナルトレーナーを付けていたも同然だろう。80年の谷沢さんは打率・369の高打率を残して2回目の首位打者を獲得し、カムバック賞を受賞。引退まで覚悟していたことを考えれば、このときも「奇跡の首位打者」だったと言えるし、前回とは違った満足感、充実感があったのではないか。

「うれしいには違いなかったけども、僕らにとって最高の満足感、充実感は優勝ですよ。ファンが喜ぶ姿は優勝が一番なんですから」

いつか近藤とじっくり話したい

74年と82年、2度の優勝に貢献したことこそ、野球人生で最高の経験だったという谷沢さん。85年に通算2000安打を達成し、翌86年限りで現役を引退した。

「8年やって2年休んで、また7年できたのも、最後まで小山田先生が診てくれたからです。先生がいなかったら17年間もできてないんですから、本当にありがたかった」

引退後の谷沢さんは解説者、評論家として活動する傍ら指導者となり、早大の大学院でプロ野球球団経営の在り方を研究している。学生時代から探求心旺盛だった方らしいと思うが、そんな谷沢さんに聞きたかったことがある。近年のプロ野球における〝投高打低〟傾向をどう見ているのだろうか。

「打法といい、投球の待ち方といい、とらえ方といい、バッターは進歩してないですよ、技術的に。ピッチャーがラプソードだとか、トラックマンだとか、計測機器を活用しているのに比べて、バッターはどこまで活用できているのか、と思うところはあります」

一概には言えないが、機器の使い方、活用の仕方がわからない、ということなのか。

「そう。でもね、アメリカではフライボール革命からずっと進化してるんですよ。縦振りで、面でとらえる打法っていうのが。それこそ大谷（翔平／ドジャース）はその打法を身につけているし、日本でも例えばホークスの栗原（陵矢）、近藤（健介）が、アリゾナの練習施設に行って打法の研究をしてますね」

インパクト時に手首を返さない縦振り。谷沢さんにすれば、習志野でアメリカの打法を教わったときと同じ感覚なのかもしれない。

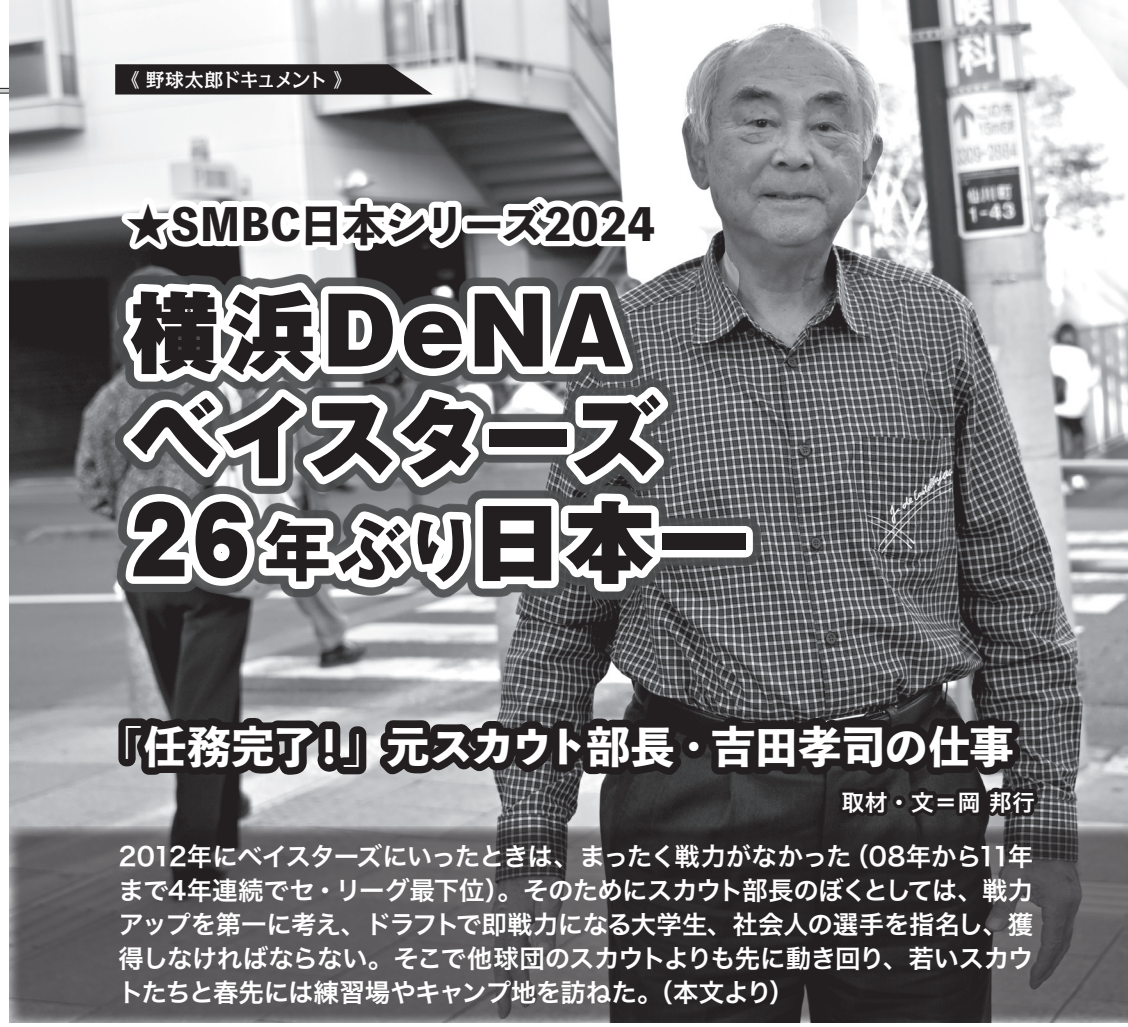
「僕は近藤に縦振りのことを聞きたいと思って、球団に電話したんです。7月にホークスが東京ドームで試合やるときに、と。でも、なぜか王さんがいらして、近藤とは5分ぐらい……。いつか、じっくり話したいですよ」

前日、日本人では唯一3割を打った近藤のパ・リーグ首位打者が決定していた。「奇跡の首位打者」の探求はこれからも続いていく。

（文中一部敬称略）

参考文献：『週刊ベースボール』（ベースボール・マガジン社）、『豪打列伝2』（スポーツ・グラフィック「ナンバー」編／文春文庫）、『プロ野球データブック《最新版》』（宇佐美徹也著／講談社文庫）

高橋安幸（たかはし・やすゆき）
1965年（昭和40）年生まれ。新潟県出身。ベースボールライター。日本大学芸術学部卒業。出版社勤務を経てフリーランスとなり、98年より昭和の名選手インタビューを続け、記事を執筆。著書に『名コーチ』は教えない プロ野球新時代の指導論』（集英社新書）などがあり、2024年7月には『暗躍の球史 根本陸夫が動いた時代』（集英社）を刊行した。



《 野球太郎ドキュメント 》

★SMBC日本シリーズ2024

横浜DeNA ベイスターズ 26年ぶり日本一

『任務完了!』元スカウト部長・吉田孝司の仕事

取材・文＝岡 邦行

2012年にベイスターズにいったときは、まったく戦力がなかった（08年から11年まで4年連続でセ・リーグ最下位）。そのためにスカウト部長のぼくとしては、戦力アップを第一に考え、ドラフトで即戦力になる大学生、社会人の選手を指名し、獲得しなければならない。そこで他球団のスカウトよりも先に動き回り、若いスカウトたちと春先には練習場やキャンプ地を訪ねた。（本文より）

2017年のシーズンと同じ顔合わせの「横浜DeNAベイスターズvs.福岡ソフトバンクホークス」のSMBC日本シリーズ2024――。

2017年のシーズン。当時のラミレス監督率いるベイスターズは、レギュラーシーズン3位からクライマックスシリーズを勝ち上がったものの日本シリーズでは、ソフトバンクに2勝4敗と呆気なく敗退。悔しいかな、19年ぶりの日本シリーズ制覇を逸した。

しかし、7年前とは一転。就任4年目の三浦大輔監督率いる今シーズンのベイスターズは、一味違った。とくにベテランと中堅選手は、7年前の悔しさをバネに若手選手をリード。レギュラーシーズン勝率5割7厘の3位とはいえ、クライマックスシリーズ（2位・阪神、1位・巨人）に臨んで勝ち上がり、その勢いを保ちつつパ・リーグ覇者のソフトバンクと対戦した。

結果として、初戦、2戦目は横浜スタジアムでのホームゲームにもかかわらず連敗し、最悪のスタートを切った。だが、ビジターで3連勝した勢いで。まさに下克上を演じ、日本シリーズを4勝2敗で制し、実に26年ぶり3度目の日本一の座を手中にしたのだ。31歳のベテラン外野手・桑原将志がシリーズMVP（最高殊勲選手）に選出された。

そして、ベイスターズナインが勝利の美酒に酔いしれた、同じ11月初旬の昼下がり――。

2012年のシーズンから20年まで9年間に亘り、ベイスターズの戦力強化のためにスカウト部長をはじめ要職を担った吉田孝司さんに会った。

承知の通り吉田さんは、巨人の日本シリーズV9時代（1965年～73年）に捕手として活躍し、84年に現役を引退し、巨人のバッテリーコーチやスカウト部長を務めた。1946年生まれの78歳。根っからの野球人だ。

感慨深げな表情を見せつつ吉田さんは、私を前に語り始めた。

「今回の日本シリーズは、2戦目は招待されて横浜スタジアムで観てね、その他の試合はテレビ観戦だった。その横浜スタジアムでの2戦目に負けたときは、正直言って『やばいなあ……』と思ったし、負け投手になった大貫（晋一）は、ぼくがスカウト部長時代に獲得（2018年ドラフト3位）した選手だからね。『大貫、しっかりしろ!』とも思った……。

とにかく、日本シリーズの場合は、初戦よりも2戦目が大事なんですよ。何故なら2戦目に勝てば、1日休んで気持ちよく移動することができるんだが、初戦に負け、さらに2戦目も逃して2連敗すると気分は最悪、暗くなる……。

ところが、今年は2017年の日本シリーズとは違った。敵地の福岡に行っても選手たちはめげず、3戦目で左腕の東（克樹）が踏ん張り、4戦目と5戦目は外国人投手（ケイ、ジャクソン）が頑張った。とにかく、2勝2敗のタイになったときのぼくは、『5戦目は絶対にいけ!』とテレビを前に心の中で叫び、3勝2敗と勝ち越したときは『大勝負だ!いけ!』と、もう日本一になることを祈ったよね。

それで6戦目は坂本（裕哉）が勝利投手になり、4勝2敗で念願の日本シリーズをものにした。2012年にベイスターズのスカウト部長に就任して9年在籍。辞めてから今年で4年かな。ようやく『仕事を果たせた……』という気持ちだね」

そして、私を直視しつつ続けた。

「ぼくが若かった頃、川上（哲治）さんが巨人の監督だった時代、あのV9時代を思い出すと、日本シリーズで初戦と2戦目を落とす2連敗は一度もないんじゃないかな。それに移動日を前にした大事な2戦目を落としたことは少ないと思う（66年＝V2、69年＝V5、71年＝V7の3回のみ）。選手誰もが『2戦目は勝たなければ』と肝に銘じていた。

捕手のぼくがV9の間で初めて先発したのはV5（69年）からでね。当日、球場に行くと川上さんに『ヨシ、先発だぞ!』と言われた。その瞬間、もう緊張しちゃって何度もトイレに駆け込んだり……。でも、V5、V6と勝ち続けるうちに、先発投手の1球目を受けると正気に戻るようになったけどね。あの400勝投手の金田（正一）さんにとっても日本シリーズは、レギュラーシーズンと違って特別なんだろうな。マウンドで1球目を投げるまでは顔が真っ青だった。

まあ、今シーズンのベイスターズの選手は、誰もが緊張する日本シリーズという大舞台で勝てた。スカウト部長のときにドラフトで獲得した選手たちが、それぞれ活躍してくれた。元スカウト部長としては嬉しい限りだよね」

そう言って頷きつつ、4年前までのベイスターズのスカウト部長時代を懐かしむように振り返ってくれた。

＊　＊　＊

13年前の2011年12月2日。株式会社ディー・エヌ・エーが球団株式の一部を取得し、「横浜ベイスターズ」から「横浜DeNAベイスターズ」として生まれ変わった。

その際に巨人OBのV9戦士でもある高田繁氏（元ヤクルト監督）が球団GM（ゼネラルマネージャー）に就任。同時に高田氏の推

薦で巨人時代の同僚でもある吉田孝司さんは、翌２０１２年のシーズンからスカウト部長に請われたのだ。

吉田さんが当時を語る。

「とにかく、２０１２年にベイスターズにいったときは、まったく戦力がなかった（08年から11年まで４年連続でセ・リーグ最下位）。そのためにスカウト部長のぼくとしては、戦力アップを第一に考え、ドラフトで即戦力になる大学生、社会人の選手を指名し、獲得しなければならない。そこで他球団のスカウトよりも先に動き回り、若いスカウトたちと春先には練習場やキャンプ地を訪ねた。もちろん、春と夏には甲子園にも出向き、甲子園大会で有望な高校生もチェックしたけどね。

思い出すのは、社会人・セガサミーの宮崎（敏郎）だね。12年のドラフト６位指名で獲得することができたんだが、打撃は申し分なく、足もそれなりだった。ただし、守備に〝？〟マークがつく選手だった。ＧＭの高田さんと一緒に東京ドームに行って、都市対抗の試合を観た。そのとき宮崎は、右中間にホームランをかっ飛ばすバッティングを見せてくれたんだが、やはり守備がイマイチでね。他球団のスカウトたちも評価せず、セガサミーに宮崎に関する調査書を依頼していなかった。

でも、スカウト部長のぼくにとって宮崎は、やはり気になる選手で、上位指名は無理としても『獲得したい』と考えていた。そこで12年のドラフト会議のときだね。各球団が５位指名を終え、６位指名に入ったときにＧＭの高田さんに『６位指名は、セガサミーの宮崎でいきます』と宣言して、獲得した次第だね……」

その宮崎は、吉田さんの期待を裏切らなかった。プロ入り１年目から１軍公式戦出場を果たし、難なく守備をこなす内野手に成長。打者としても活躍しているのは知っての通りだ。

「宮崎が活躍してくれたお陰でね、２年目の２０１３年からはスカウト部長としてやりやすくなった。と言っても１位から３位までの上位指名選手は、他球団も狙っているため、何かとスカウト部長は神経を使うため大変なんですよ。一応、他球団に指名されたときのシミュレーション……『それなら次はこの選手でいくぞ』と決めてはいるけどね」


【写真】産経新聞社

のちに首位打者にもなる宮崎敏郎選手の活躍で、吉田さんのスカウト部長としての仕事もやりやすくなったという